

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUJIAKU

2015. 7 No.85

切手門跡

トピックス

津山城を歩いてみよう
可児市との歴史友好都市締結20周年
矢吹家文書、市重文に指定

資料紹介

佐平焼の置物ーライオン型ー 東 万里子
永礼孝二「ロシア人形」「小諸城跡」
梶村 明慶

研究ノート

津山藩主森家の黄檗信仰
ー新出資料からの一考察ー 小島 徹

お知らせ

特別展・ミニ企画展のごあんない

(表紙写真 津山城跡に咲くアジサイ)



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

文化財めぐり「津山城を歩いてみよう」

津山城の解説本『学芸員が作った津山城の本』発刊を記念して、5月9日に第105回文化財めぐり「津山城を歩いてみよう」を開催しました。博物館前を出発して大手側の冠木門跡から本丸へと順番に登って行き、下りは搦手側の裏下門跡、北門跡を経て鶴山公園を出た後、かつての城の広さを実感していただくため、埋め立てられている堀の外周をめぐって、博物館へ帰るコースを歩きました。

平素の文化財めぐりのご案内は友の会の会員のみでしたが、今回は一般市民に広く参加を募ったところ、予想を大幅に上回る127人の方々にご参加いただき、市民の皆さんの津山城への関心の高さを改めて感じました。小中学生を含む家族連れでのご参加もあり、ふだんの文化財めぐりでは見られない光景でした。

この日の気温は、5月にしては少々高かったのですが、天候にもめぐまれ、参加者の皆さんは『学芸員が作った津山城の本』を片手に津山城の散策を楽しんでおられました。



表中門跡

津山城跡は鶴山公園の中だけではないんだねえ。

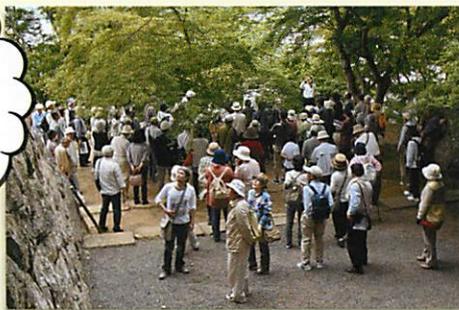


博物館キャラクター「ファイアー」

多数のご参加、本当にありがとうございました。



博物館キャラクター「パレ夫」



裏鉄門跡



山下児童公園(堀の跡)

可児市との歴史友好都市締結20周年

可児市の人口は
約10万人、
市の花はバラ
なんだって。



博物館キャラクター
「鯉若」



バラ咲き誇る花フェスタ記念公園



兼山・可成寺を訪問



市長どうしの記念品交換

初代津山藩主・森忠政の出身地であることから、平成7年10月16日に岐阜県可児市（旧兼山町）と歴史友好都市の締結を行い、今年で20周年を迎えています。その記念として、5月29日〜30日に総勢32人の訪問団が派遣されました。

初日は兼山を訪問し、森家の墓所がある可成寺・常照寺や歴史民俗資料館を見学の後、交流会が開かれ、兼山の皆さんとの親睦を深めました。2日目は、可児市の花フェスタ記念公園で開催される「花フェスタ2015可児市ウィーク」の開会式において、市長による記念品交換が行われ、友好の絆を再確認しました。

秋には可児市から訪問団が派遣される予定で、日程を調整中です。これを機に、市民の皆さんにも可児市について理解を深めていただき、可児市からの訪問団を盛大におもてなしましょう。

矢吹家十二支箱文書 市重文に指定

当館に寄託されている矢吹家十二支箱文書が、津山市重要文化財に指定されました。矢吹家資料は、古文書・絵図・和書などを中心とした資料群で、その中核を成すのが十二支箱文書です。

十二支箱文書は、津山松平藩時代に農村支配に当たっていた郡代所の文書で、郡代が受け取った村々の願書や他藩役人からの書状、郡代自らが作成した書類などで構成されます。明治初期、歴史資料の保存と郷土史研究に熱意を燃やしていた矢吹正則が、いずれ処分されるであろう郡代所文書を手入して、保存を図りました。そして、矢吹家において十二支に仕訳された木箱に整理してあったことが、名称の由来です。

美作地域の近世史研究に不可欠な資料として、4月23日に指定されました。



佐平焼の置物 ——ライオン型——

東万里子

最終ページの特別展のご案内にある通り、今年度の特別展では佐平焼を取り上げます。佐平焼のうち一番多く遺されているのは花器で、一番多く作られたのも花器だと考えられます。しかし、置物類も制作したとある文献もあり、また、特別展準備の過程で新たに書簡等が見つかったことにより、浮田佐平が、大規模な窯を築いて間もない時期に置物制作も視野に入れていたことが分かってきました。ここでは浮田家に遺されていた関連資料の一部について考えます。

資料①は、13年7月23日消印の室谷秀司が浮田佐平にあてたはがきです。佐平焼が作られた時期を考えると、消印は大正13年と考えられ、大規模な窯を築いて一年もたない時

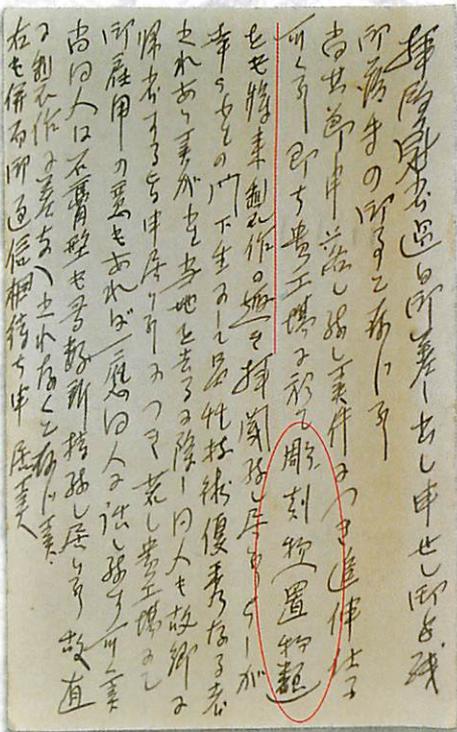
期です。このはがきから、佐平がこの時期、将来「彫刻物（置物類）」制作の意向を持っていた事が分かります。室谷は「伊部焼を改良し美術的に且つ実用的製品となすべく目下県工業試験場に於いて研究調査」（大阪朝日新聞大正12年3月31日付記事）をしていた人物でした。室谷はこのはがきで置物制作が得意な門下生を佐平に紹介していますが、その後の経緯はよくわかりません。

佐平は置物制作に関して、京都の陶磁器試験所に勤めていた徳見知孝にも相談しています。

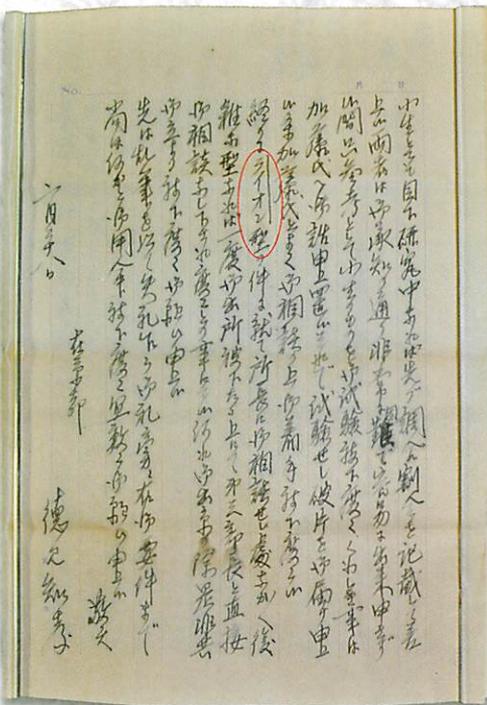
資料②は、14年2月28日消印の徳見知孝が浮田佐平にあてた書簡便箋三枚のうち三枚目です。この書簡では、素地試験や釉薬についてなど非常に興味深い文面が多々ありますが、

今回は資料②の中程にはつきりと見える「ライオン型」という部分以降に注目しました。要約すると、ライオン型は非常に複雑なので、京都に來られる折に直接部長と相談してほしい旨が記されています。当時、唐獅子や大黒の型と比べると、ライオン型は新しい型だったのではないかと思えます。実際にライオンの置物が遺されています。（資料③）

置物は花器に比べると非常に少ない点数しか遺されていませんが、浮田佐平が、美作の特産品を作るという目的をもって佐平焼制作に取り組むなかで、様々な挑戦をしていたことが分かります。秋の特別展では挑戦の過程で遺された作品や資料も、紹介したいと考えています。



資料①



資料②



資料③
たてがみの毛が少ないが、尾がライオンの特徴をとらえている。

永礼孝二「ロシア人形（女）」・「小諸城跡」

梶村 明慶

写真は津山出身の版画家、永礼孝二の作品です。

永礼孝二は明治34年に現在の津山市志戸部で生まれ、大正8年に洋画家を志し上京しますが、やがて版画の世界に惹かれこの道に進むことになりました。昭和5年には日仏協会主催第2回国際美術展版画部に出品。その後も、日本版画協会展や国画会展に数々の作品を出品します。その

後、昭和20年には、疎開先の郷里で棟方志功と出会い、創作にかける情熱に共感し、同27年に棟方志功らが創設した日本板画院の第1回展に出品。以後晩年まで作品を出品しました。

人形を描いている作品は、第20回日本版画協会展へ出品した作品で、「ロシア人形（女）」、風景画の方は「小諸城跡」です。彼の作品は「和のモチ

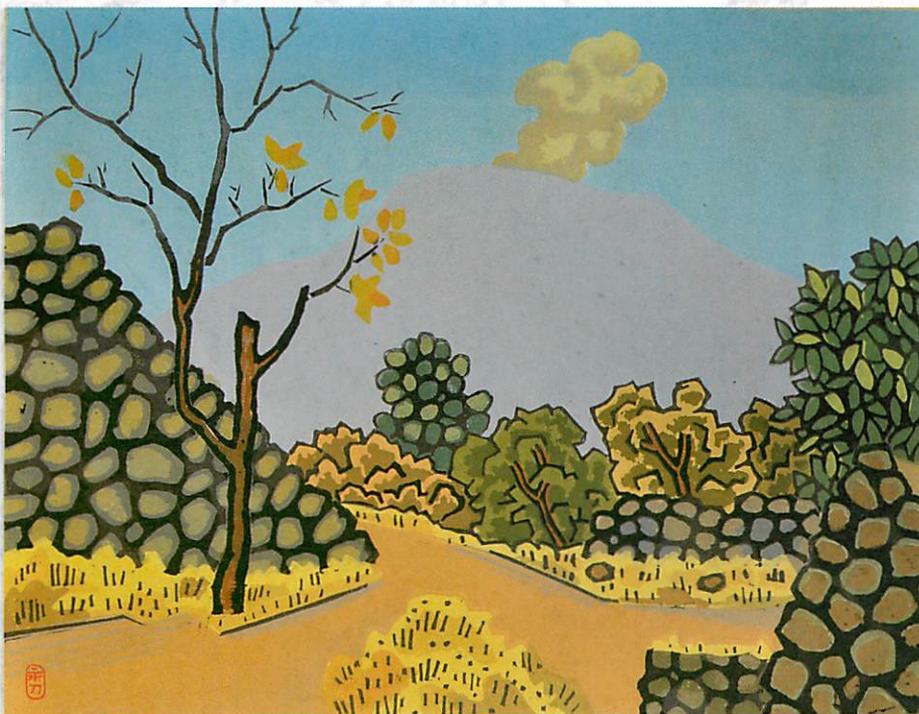
フに洋画の構図を巧みに取り入れ、マティスのようなシンプルかつ大胆な色の表現で、しつとりとした透明感のある作風」とも言われています。今回、ご紹介した作品「ロシア人形（女）」は大胆な色使いが印象的な作

品ですが、一方の「小諸城跡」は落ち着いた透明感のある印象を受ける作品です。

このたび永礼孝二の親戚の方から、これらの作品をはじめ多くの関連資料を寄贈していただきました。



ロシア人形（女）

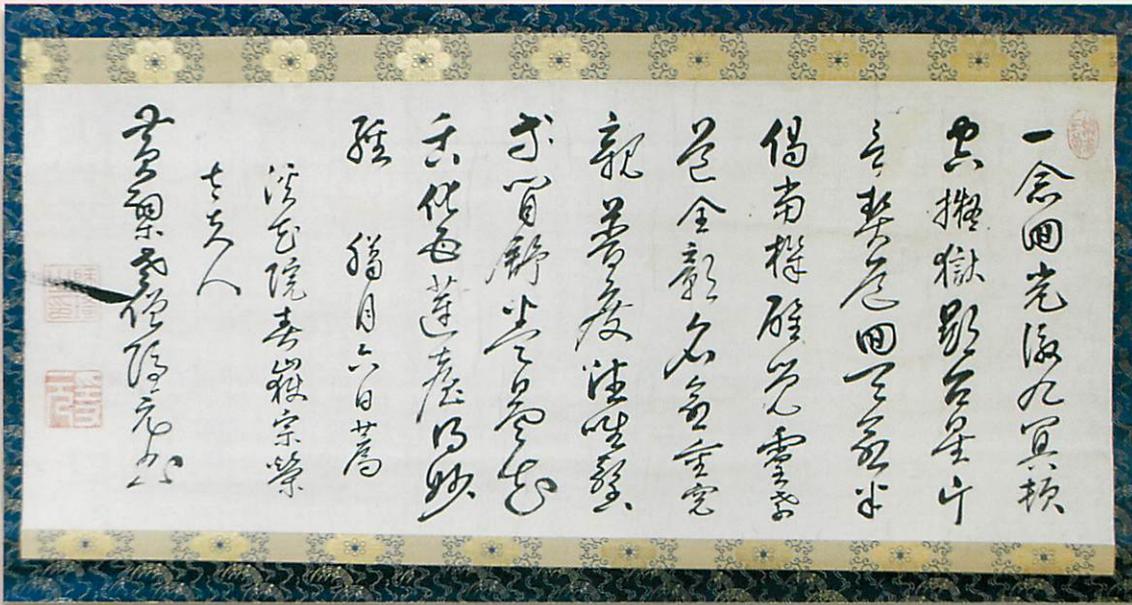


小諸城跡

津山藩主森家の黄檗信仰

—新出資料からの二考察—

小島 徹



新たに見つかった隠元の書(倉敷・龍昌院蔵)とその解説文(左下)

はじめに

津山藩主森家一族の菩提寺としては、大型五輪塔の墓石が建ち並ぶ本源寺や宗永寺などがよく知られています。これらは臨済宗の寺院ですが、森家では一時期、同じ禅宗の一派である黄檗宗に帰依していた様子が見受けられます。それは、2代藩主・長継の治世

の後半から改易までの30年あまりの期間です。領内下田邑に千年寺、西一宮に本光寺という黄檗寺院が建立され、長継の逆修塔や一族の墓所が整備されました。森家が改易となつて津山を去つたため、その黄檗信仰の実態はよくわかっていません。しかし、最近になってその一端をうかがえる興味深い資料が見つかりましたので、それを紹介しつつ考察を加えたいと思います。

雲濤』三集)、さらに寛文4年(1664)の年譜に「為作州太守薦母拈香」⁶⁾とあり(『普照国師年譜』)、この年の暮れに五十回忌を迎えた溪花院の供養のため、長継が隠元に依頼して書かれたものと判明しました。また、筆跡や落款の印章などからも、隠元の真筆と見てほぼ間違いないと断定されました。

1. 見つかった隠元の書

最近見つかった資料とは、隠元の書です(上の写真)。56字の字数から、七言律詩とわかります。末尾に「臈月(12月)六日薦 溪花院春嶽宗栄太夫人」とありますが、「溪花院」以下は法名で、森忠政の娘・於郷を指します。彼女は森家の一族に当たる関成次に嫁ぎ、男子3人を産みますが、元和元年(1615)12月6日に21歳の若さでこの世を去りました。「薦」には「供えたてまつる」の意があつて、命日の回忌法要のため書かれており、これは単なる漢詩ではなく詩偈と呼ばれるものです。

2. 長継の生い立ちと溪花院

長継は慶長15年(1610)に関成次・於郷夫妻の長男として生まれました。於郷は森忠政の娘なので、忠政の外孫に当たります。その後も、於郷は長政・衆之と男子を続けて産みますが、幼い3兄弟を残して元和元年に亡くなりました。法名は溪花院春嶽宗永大姉、夫・成次はその菩提を弔うため、墓所だけでなく寺院を津山の西寺町に建立し、その法名を寺の名にしています。寛永10年(1633)、忠政の嫡男・忠広が没し、他に実子が無かつた忠政は、外孫の長継を後継者と決めました。その翌年、忠政が京都で急死したため、長継は2代藩主となったのです。

年代が記されていませんが、『隠元全集』に「森内記長継居士求薦乃堂溪花院春嶽宗栄太夫人五十年忌」の題でこの詩偈が収録され(『隠元和尚

長継は母の供養のため新寺を造営し、明暦2年(1656)に落成すると、母の法名から取つて宗永寺と名付けます。実父による寺院創建では満足

一念回光徹九冥／頓
空擬獄頭台星／片
言契道回天命／半
偈当機醒覺靈／孝
道全彰名愈重／冤
親普度德唯馨／
等間舒卷曇花
舌／化母連台得妙
経 臈月六日薦
溪花院春嶽宗栄
太夫人
黄檗老僧隠元書



津山城下町絵図に見る西寺町・溪花院の境内地縮小の様子
享保7年(1722)図(左)と嘉永7年(1854)図の比較:赤線で囲んだ箇所
幕末期までに、当初の半分以下に縮小しています。



溪花院跡地の現況
新高倉稲荷神社が祀られています。



宗永寺境内の森家墓所(左)と溪花院の供養墓

せず、藩主としての威信をかけて供養したかったのでしょうか。いずれにせよ、わずか5歳で母を失った悲しみの大きさと追慕の念の深さを知ることができません。この頃から寛文年間(1661~73)にかけて、彼は領内の寺社の整備に努めますが、ちよūdōその時期に日本に伝わった黄檗宗に傾倒し、「はじめに」で述べたように、千年寺・本光寺を創建しました。先に紹介した資料も、まさにこの時期のもので、生母の供養を

おわりに
来日僧・隠元を開祖とする黄檗宗

宗祖に依頼した所に、彼の傾倒ぶりがうかがえます。
なお、西寺町の溪花院は森家改易後に無住となつて徐々に衰退し、明治末年頃に今の倉敷市亀島辺りへ移転、その後廃絶してしまつたようです。
3. 弟・長政夫妻と隠元
長継の2つ違いの弟・長政も、黄檗宗に帰依していました。兄から美作のうち1万8千石余を分与され、大名の扱いを受けていた彼は、隠元に仏舎利の賛を求めたり、還暦を迎えた祝いの詩偈を贈られたりしています。『隠元全集』で確認する限りでは、兄の長継よりも信仰の度合いが深かつたように見受けられます。そして、長政の妻・松仙院も黄檗宗を信仰していたのか、臨終の際の遺言に従つて移築された彼女の江戸屋敷が、宇治に開創された萬福寺の松隠堂であると言われています。ただし、現存の松隠堂は元禄年間に改築されたものです。また、「森家先代実録」によると、長政の妻は真田信吉の娘ですが、離縁して公家の千種家に嫁いだとあり、その法名も屋敷の寄進も確認できません。しかし、長政を祖とする関家の江戸の菩提寺は、黄檗宗の瑞聖寺であり、長政自身が深く帰依していたのは確かです。

には、徳川將軍家をはじめ諸大名にも帰依・寄進する者が多く、仙台藩主伊達家・長州藩主毛利家・鳥取藩主池田家などは領内に黄檗寺院を開き、菩提寺と定めて歴代藩主の墓所を整備しています。森家の場合、わずか4代で改易の憂き目に遭い津山を離れたため、菩提寺や墓所をどのように整備していくつもりだったのか、詳細はわかりません。ただ、長継が黄檗寺院を領内に開創したのは、弟・長政をはじめ一族の中に黄檗宗の信仰を深めた者がいて、その信仰を容認していた証でしょう。そして、今回紹介した資料は、千年寺に残る逆修塔とともに、長継自身の黄檗宗への信心をうかがい知ることのできる貴重な資料といえます。



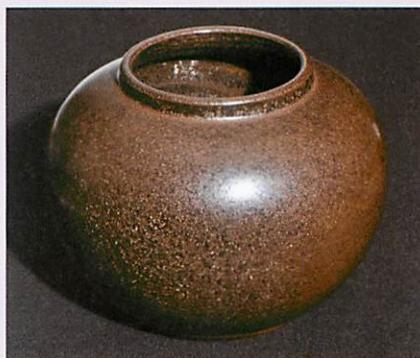
千年寺境内の現況 右奥に見えるのが長継の逆修塔。

特別展・ミニ企画展のご案内

特別展「佐平焼 ―結晶釉の美と特産品創出―

会期／10月3日(土)～11月8日(日)

浮田佐平(1867～1939)は、製糸業をはじめとして、植林、製材所、三椏の栽培、奥津峡の観光開発など、多彩な事業をなした実業家でした。50才を過ぎた佐平は、郷土の特産品を増やすため、各地から陶工を呼び寄せて大規模な窯を築き、最高の焼き物づくりに挑戦しました。これが、佐平焼と呼ばれる焼き物です。難しい結晶釉にこだわって制作された佐平焼は、美しく光る細かな模様をその特徴とします。今回の展覧会では、知られざる佐平焼の魅力を紹介いたします。



●ミニ企画展「津山藩主森家と黄檗宗」

会期／7月18日(土)～8月30日(日)

本号の研究ノート(6～7ページ)で紹介した、黄檗宗の高僧・隠元の書を展示し、森家と黄檗宗との関係を紹介するミニ企画展を開催します。

○津山市史講座(講演会)

上記のミニ企画展に関連して、隠元の書を鑑定していただいた研究者をお招きし、講演会を開催します。隠元らの渡来によって黄檗宗が日本にもたらされますが、単に宗派が広まっただけでなく、当時の日本に与えた文化的な影響は非常に大きなものでした。隠元らの渡来僧が日本にもたらした影響について、おもに近世初期の東アジアの書道文化の観点からお話いただきます。

演題：隠元が近世の日本に与えた影響 ―書道文化を中心に―

講師：愛知学院大学准教授 劉 作勝先生

日時：7月26日(日) 午後1時30分～

会場：当館2階研修室

※参加費は無料ですが、博物館の入館料が必要です。



博物館だより「つく」
No.85 平成27年7月1日

津博
TSUBAKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tv.tn.ne.jp

【印刷】有限会社 弘文社

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00

【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月29日～1月3日)・その他

【入館料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。